

本書は Mekong プロジェクト, Nam Pung プロジェクト, Pattni プロジェクト, Nakorn Srithamarag プロジェクトおよび河川開発プロジェクトにおいて, National Energy Authority によって作業をされ集計されたものである。最大の目的は降水量と流出量との関係を研究するにある。

流量観測所の数は46ヶ所である。内容は月間流出量, 平均流出量 1000km<sup>2</sup> 当りの平均流出量, 流出高, 流出量, 最大日流量および最小日流量がある。

なお, このうちの観測所の一部はメコン河開発の一環として建設された部分も含んでおり Lower Mekong Hydrologic Yearbook と多少重複する点もあるが, 東北タイの水利計画に対する研究を行う場合の重要な参考資料の一つと考えられる。

1962年の水文年報は1964年に出版され, 1963年のものは1965年に出版されたが, 何れも販売はしていない。何れも市販されていないもので寄贈形式で頒布されている。(南 勲)

*Lower Mekong Hydrologic Yearbook.*  
Committee for Coordination of Investigations of the Lower Mekong River Basin, 1964.

メコン河は4ヶ国にまたがる大河川でありその水力電気, かんがい, 舟行, 洪水調節および民生に対する総合的な発展を目的として, カンボジア, ラオス, タイ, ベトナムの4ヶ国により, メコン河委員会が設立されている。本水文データはこれらの諸国の水利開発分野で各国それぞれに重要な基本的な資料である。とくに水源計画に際しては技術的にも経済的にも重要な資料である。本書により低部メコンの流量特性の概要をつかむことができる。

最初の年報は1962年の水文資料に対するもので, 以後毎年継続して出版することが決定されている。1963年度の水文年表は1964年2月に出版された。

本水文年表はその初版から数えて現在まだ第2巻しか出ていないが, 東南アジアの水利計画を研究する上に極めて重要な資料となるものと確信している。

本水文年表の内容は流量観測値がメコン河本流ならびに支流に対して集録され, 次に流水中に浮遊運搬されている泥土量, 日降雨量がラオス・カンボジア・タイ・ベトナムに渡って記され, また日蒸発量および毎

日の風速が記録されている。

いずれも販売はしていない。(南 勲)

Theodore Friend: *Between Two Empires, The Ordeal of the Philippines, 1929-1946.* Yale University Press, New Haven, Conn., 1965. xviii+312p.

このたび「2つの帝国に挟まれて——1929年から1946年に至るフィリピンの試練——」と題する本書を手にして, 私はひじょうに嬉しかった。というのはフィリピンを理解するためには, その歴史的背景をよく知っておくことが必要である。とりわけ, フィリピンとアメリカとの関係の歴史的展開こそ, フィリピン理解の鍵であるといえよう。ところが, これについてまとまった文献がこれまで出版されていなかった。

もともと米比関係は, 本書の著者, The State University of New York at Buffalo の歴史学準助教授フリード氏によると, つぎのように区分される。

- 1) 1896—1902: スペインおよびアメリカにたいするフィリピンの革命戦争。
- 2) 1901—13: 共和党政権下での政府・教育の《アメリカ化》。
- 3) 1913—21: 民主党政権下での行政の《フィリピン化》とナショナリズムの奨励。
- 4) 1921—29: フィリピンの希望とアメリカの抑止との均衡の漸次的実現。
- 5) 1929—35: 第1次植民地危機: 大恐慌・日本の膨張およびフィリピンのナショナリズムのためアメリカ議会は独立のスケジュール設定の方向に動く。
- 6) 1935—41: コモンウェルス時代: 不確実だが部分的に成功であった独立準備。
- 7) 1941—46: 第2次植民地危機: 日本の侵略および部分的な《日本化》, アメリカによる解放およびフィリピン主権の完全な獲得がつづく。

本書はこのうちでも, より重要な1929年の大恐慌から始めて1946年のフィリピン独立に至る期間をとりあつかう。著者は, フィリピン, アメリカ, および日本の文書を渉猟し, またこの3国にまたがるこの関係をインタビューしている。非常な努力と時間のかかった仕事だ。(アメリカ人の近代史あるいは現代史研究がとっているこの方法は, わが国ではもっと学びとら

れる必要があろう。

本書は5部からなる。第1部はフィリピンのコンテクストとして、フィリピンの社会・政治・ナショナリズム・リーダーシップなどの特質をとらえる。第2部は大恐慌、日本の進出、アメリカの後退開始期をとりあげる。第3部は独立のための米比間の折衝をとりあつかう。第4部はコモンウェルス時代。そして第5部は大試鍊と題してこの日本の進路・占領からフィリピン共和国の発足に至る。最後にクロノロジーと、非常にすぐれた文献目録がつけ加えられている。

歴史学者でない私は、本書の学問的価値を論ずることはできない。しかし、Yale Historical Publications, Studies 22 として本書が刊行されていることは、その学問的価値を証明するものでなかろうか。また私自身にとって、Quezon, Osmeña, Roxas などのフィリピンを動かした人々、あるいはアメリカ側の MacArthur, Stimson, Hoover, Roosevelt などの立役者の活動をまざまざ記録した本書は、まことに面白い読物でもあった。(本岡 武)

Geravdo P. Sicat (ed.): *The Philippines Economy in the 1960's*. Institute of Economic Development and Research, University of the Philippines. Quezon City, 1964. xii + 281 p.

フィリピン経済の代表的文献としては、コーネル大学のゴーレー教授の著書(F. H. Golay: *The Philippines, Public Policy and National Economic Development*. Cornell University Press, Ithaca, N. Y., 1960) があげられるが、本書はこれにつぐものとして評価されている。幸に、私は、去る6月たまたまフィリピン大学の経済発展研究所で本書を入手した。(米・英・独・仏などでの出版物は、外国書取扱い書店をとおして、わが国にどしどし入れられているが、東南アジア諸国での刊行物は、よほど注意しないと、ミスしがちになるからである。)

フィリピン大学経済発展研究所が、1963年10月から12月にかけて、「1960年代のフィリピン経済」という主題のもとで連続公開講演会をマニラで開いた。そのペーパーを教授が編集したのが本書である。1960年代の経済という主題であるものの、多くの論文は、この時間的限定をこえてフィリピン経済の構造の分析にお

よんでいる。

本文に収録されている論文をあげよう。

- 1) Sicat 教授によるフィリピン経済の総論
- 2) フィリピン大学 Romulo 総長の開講演説からの抜粋としての《1960年代のわれわれの任務》
- 3) フィリピン大学 A. Kintanar, Jr. 教授の《1960年代の公共部門開発のための課税融資》
- 4) 経済企画庁 A. V. Fabella 長官の《開発計画の若干の戦略的側面》
- 5) フィリピン大学 R. W. Hooley 教授の《1960年代の私的貯蓄：社会会計の一試論》
- 6) 国際稲作研究所 V. W. Ruttan 博士の《農地改革と国民経済発展》
- 7) 経済企画庁 D. M. Ferry 立法・政策研究部長の《農民改革の憲法的・社会的側面》
- 8) 国家経済会議 S. K. Roxas 議長の《フィリピンの地域的経済発展——1960年代の工業地域計画》
- 9) Sicat 教授の《フィリピン工業の構造——1960年代の見とおし》
- 10) フィリピン中央銀行 B. Legarda 調査部長の《フィリピン外国貿易の諸問題》
- 11) フィリピン大学 A. A. Castro 経済発展研究所長の《企画長期金融の諸問題》

各ペーパーの末尾に Open Forum として、聴講者と報告者との間の質疑応答が掲載されている。フィリピンでは、私の限られた経験によっても講演のあとのディスカッションが非常にすきなようだ。このディスカッションについては、長所短所いろいろとあるが、ディスカッションによって論点がより明らかになるという長所が認められる。本書はこの長所をよく生かしていると思われる。

個々の論文を批評する余裕はないが、Ruttan 博士の農民改革論はきわめてすぐれたものである。とくに、メンションしておく。(本岡 武)

*Wacanānukom Phāsā Lāw khōng Kasuang Sūksāthikān*. 2nd. ed., Vientiane, 1962 vi + 1125p. *English-Lao Dictionary (Wacanānukom Angkit-Lāw)*. compiled by Boon Thom Boonyavong, under the supervision of J. DeNoia, with the technical assistance of G. E. Roffe. Vientiane, Lao-